

平成 23 年度入試の出題の意図・採点総評



北九州市立大学

一般選抜

外国語学部	P 1
経済学部	P 4
文学部	P 7
法学部	P15
地域創生学群	P17
国際環境工学部	P19

推薦入試

外国語学部	P28
経済学部	P30
文学部	P31
法学部	P34
国際環境工学部	P35

平成 23 年度入試の出題の意図、採点総評 <<一般選抜>>

◆ 外国語学部 前期日程（英語）

<出題の意図・ねらい>

試験では高等学校卒業程度の英語の基礎学力とともに英語読解力、英語表現能力を判定する。

問題 1 は長文読解。科学的問題（人間の制御を超えるコンピューターの出現）について論じた英語長文を読み、内容を正確に理解できているかを問う。

問題 2 は長文読解。レスキュー隊の隊員や仕事に関する英語エッセイを読み、文脈をとらえられるか（問 1～問 5）、内容を理解して日本語にできるか（問 6）を問う。

問題 3 は長文読解。日本人の姓の歴史に関する英語エッセイを読み、文脈をとらえられるか（問 1～問 4）、姓に関する大きな変動の内容を充分理解して日本語にできるか（問 5）を問う。

問題 4 と問題 5 は和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う。

問題 6 は英文エッセイ。与えられた英文のテーマに従って、短いエッセイを書く英語力を問う。

<答案の特徴と傾向>

問題 1 は長文読解。科学的問題（人間の制御を超えるコンピューターの出現）について論じた英語長文を読み、内容を正確に理解できているかを問う。

理解度を問う問題は比較的よくできていた。全問正解の答案もかなりあった。

問題 2 は長文読解。レスキュー隊の隊員や仕事に関する英語エッセイを読み、文脈をとらえられるか（問 1～問 5）、内容を理解して日本語にできるか（問 6）を問う。

問 1～問 5 の文脈をとらえる問題のできは充分ではなかった。が、5 問とも正解できたものもかなりあった。

問 6 は日本語訳であるが、基本的な文構造が理解できていない答案が散見された。二つの still の意味が取れていない答案も相当数あった。

問題 3 は長文読解。日本人の姓の歴史について論じた英語エッセイを読み、文脈をとらえられるか（問 1～問 4）、姓に関する大きな変化の内容を充分理解して日本語にできるか（問 5）を問う。

問 1～問 4 のできはあまりよくなかった。

問 5 で明治時代に姓の使用が認められた点についてはほとんどの受験生が理解したようであるが、政策の目的や登録を求めた理由まで正確に理解した答案はそれほど多くなかった。少数であるけれど、「明治政府」と「新明治政府」を別のものと理解している答案も見られた。

問題 4 は和文英訳。与えられた日本語の文を正確に英語に訳す力を問う。

基本的な語彙力、文法の知識を用いて、正確な英文を書く力が試された。語彙の面では「非日常的空間」

や「～としての感覚」の英訳に苦労している答案が多く見られた。基本的な文法・構文に正確さを欠く答案も少なからず見られた。

問題5も和文英訳。英語にしにくい日本語だった。多くの答案が一つ一つの字句にこだわって英訳したため、文意の通らない英文になった例が多かった。日本語の文意を正しく理解して意識したものは高得点になった。

問題6は英文エッセイ。与えられた英文のテーマに従って、短いエッセイを書く英語力を問う。

解答の大多数が直接話題に取り組んでいる点は評価できる。構文に正確さを欠く答案、前置詞の使い方がうまくできていない答案が多く見られた。英語の語彙力が限られている点が際立っていた。創作力のレベルはもう少し高くあってほしかった。

◆ 外国語学部英米学科 後期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

問題1

問1 映画産業の推移とハリウッド映画に対抗するためにイギリスが国策として税の引き上げ、さらにそれに対する市民の反撥、ハリウッド映画のイギリス社会にとっての魅力などが描かれている。英文は一部長い文章もあるが、全体的に内容を追う形で把握するには平易であると思われる。それだけに要点をきちんと捉えているかどうかの問題となる。

問2 海外の文化を受容する権利と国策の衝突という問題を設定して、本文の内容を踏まえた上で、この問題を具体的な形で自分の意見として述べられるかを問う。各自の意見の独創性、主張の内容を第一義的に評価するが、当然、論の展開の仕方も重要な観点になる。

問題2

最近のアメリカで男女別の教育の方がより教育効果がある、という実験報告がなされている。このことを踏まえて、日本の現状、自己体験などを通じて自分の意見を英語で述べる力を見る。基本的には英語の表現能力を判定することにあるが当然、個人の主張の内容も評価のポイントとなる。

<答案の特徴と傾向>

問題1

問1 英文要約

今回は、問題文が20世紀におけるイギリス映画の変遷であり、概して出来が良かった。基本的な流れを問題文に沿って押さえておくと、的確な答案内容ができると思う。

問2 あなたの意見

問が音楽、映画といった身近な問題だったために、各自の意見はかなり明確に出されていた。ただ、私的な感情的な立場からのものが半数近く、深い議論になってない解答が多かった。問を外国文化と日本文化のように捉えて国の政策としての観点が欠けている解答も見られた。

問題2

パラグラフの作り方がうまくできておらず、文章が連続していて、論旨の展開が明確でない解答が多かった。また、語彙力が不足していて、同じ語だけを何度も使用しており、的確な表現ができていない解答も多かった。

◆ 外国語学部中国学科 後期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

中国の経済的台頭と日韓併合100年目の東アジアについて、多様性の相互尊重を重要視する論説文を問題文とし、文章読解力と要約力・作文力、及び問題文が提起する主旨に即して自らの具体的意見を展開する力を問うた。

<答案の特徴と傾向>

問1の内容要約は正確に内容をまとめた答案が多かった。しかし、問2の東アジアの多様性認識に関する自己の見解を問う問題は、出題の主旨を十分に理解していない回答が多かった。

◆ 外国語学部国際関係学科 後期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

この試験では、資料として、日本とアジア諸国との関係を異なる角度から論じた文章を取り上げた。問1では、筆者が主張する内容を的確に読み取る力を備えているかどうかを確かめることがねらいである。問2では、二つの資料が提示した日本のアジア諸国への関わり方の現状と問題点を踏まえた上で、自分の考えを明快な論旨で説明できるか、また、的確な文章表現力が身につけているかを見ることがねらいである。

<答案の特徴と傾向>

問1

問1では日本の援助体制や官民協力をめぐる問題について、韓国と比較しながら要約することが求められ、また、論点の明確さと文章のまとまりについても評価対象とされた。大半の答案は要点をほぼ押さえていたが、韓国企業に関する事象の説明にとらわれすぎて、要点を十分に説明できていなかった答案も一部見られた。また、資料1は、官民一体の取り組み不足を指摘していたにもかかわらず、単なるコミュニケーション不足としてとらえていた答案も見受けられた。

問2

全体の3分の1程度の答案については、問題の趣旨を踏まえ、自分なりの論理を展開できていたものの、全体的に文章力や論理性の乏しさが感じられた。また、問題の趣旨を十分に把握しないまま解答した答案も多かった。2つの資料の議論を参照して論じるように明確に指示しているにもかかわらず、1つの資料しか参照していない答案や、問題で求められていることとは関係のない議論を展開した答案、あるいは資料を単に参照したにとどまった答案が目立った。

◆ 経済学部 前期日程（英語・数学）

《英語》

＜出題の意図・ねらい＞

問題 I,II は長文読解問題。

問題 I

- 問 1 特定語句の意味を解釈でき、代動詞の指示内容を把握しているかを見る。
- 問 2 指示代名詞の指示内容を明らかにする力を見る。
- 問 3 やや複雑な構造の動詞目的節を正確に読み取る力を見る。
- 問 4 条件節と帰結節からなる複文を正確に読み取る力を見る。
- 問 5 本文で述べられている内容を把握し、制限された文字数で述べる力を見る。

問題 II

- 問 1 連続する等位節の意味のつながりを正確に把握する力を見る。
- 問 2 関係代名詞の用法について、理解が十分かを見る。
- 問 3 指示代名詞の指示内容を具体的に説明する力を見る。
- 問 4 文中の適切な語を特定する力を見る。
- 問 5 代名詞、代動詞の具体的な指示内容を把握すると同時に、倒置文を理解し、連続文の意味のつながりを正確に読み取る力を見る。

問題 III、IV

III は文脈から文意を考慮して英語に訳す力を問う問題。IV も文脈に沿った英語訳が求められる。いずれも語彙選択の適切さ、文法的な正確さなどを見る。

＜答案の特徴と傾向＞

問題 I

インターネット上の翻訳支援システムに関する長文の読解問題。英文を日本語訳する問題の中、問 1 の英文が最も複雑だったため、内容把握が十分でない答案が多かった。一方、問 3、問 4 は語彙、文構造を理解できている答案が多数で、得点も高かった。問 2、問 5 では問題文を注意深く読んで、的確に解答しているか否かで、得点差が出た。

問題 II

自伝を題材とする長文の読解問題。問 1、問 2 の英文を日本語訳する問題は全般的に内容把握ができていたが、関係詞の用法が理解できていない答案が一部にあった。問 3 は具体的な場面を述べたうえで、内容を説明することが求められた。問 4、問 5 は文脈が把握できていれば、確実に得点できた。

問題 III, IV

基本的な文法に誤りが少ないことが何より、必要であった。その上で、文意をうまく捉え、日本語が伝えようとしている内容を英訳することができた答案は高い得点が与えられた。

《数学》

＜出題の意図・ねらい＞

本学の数学入試では、基本的な問題が出題されています。いわゆる難問は出題されません。基本的な定理や公式の理解力と論理的な思考力を試すのがねらいです。単なる暗記力や計算力よりも、問題の分析能力と的確な判断力や工夫する力を見るのがねらいです。また、出題の範囲に十分注意してください。

＜答案の特徴と傾向＞

問題 1

問題 1 は基本的な事項をきちんと理解していれば解ける問題です。(1)と(2)は等差数列と等比数列の3隣項の関係、(3)は等差数列と等比数列の公式の理解ができていれば容易だったでしょう。(1),(2),(3)は多くの受験生がよく出来ていたようです。(4)は絶対値の処理が必要ですが、符号についての計算ミスが目立ちました。(5)では分母が等差数列の積となっています。これをうまく分解して最後まで正しく計算が出来ている答案は少なかったようです。

問題 2

小問(1)と(2)は、放物線の接線の方程式を求める問題でした。微分の基本的な性質を理解しているかどうかを問う問題でしたので良くできていました。(2)では、問題をきちんと読まなかったのか、 p を用いずに表した解答や、直行する直線の傾きの関係を理解していない解答が見受けられました。小問(3)は直線の交点を求める問題でした。ここでも、 p を用いない解答が見受けられました。小問(4)は、定積分の計算を行う問題でした。計算が複雑だったので、途中であきらめたと思われる解答が多く見られました。また、積分範囲が逆になっているものや、放物線と接線の位置関係が理解できていない解答も見受けられました。

問題 3

この問題は三角関数と図形について考える力をみる問題ですが、全体的に解答率が高くありませんでした。(1)は三角関数の定義から計算をせずに容易に求められる問題ですが、正答率が高くありませんでした。(2)については正弦による三角形の面積の公式と角の2等分線の定理を用いると解くことができますが、他の小問と比較すると解答率は高かったです。(3)は直交条件を用いて解く問題ですが、解答していても計算途中でのミスが見られました。(4)(5)は(3)で求めた垂線の足を用いて解く問題ですが、解答率は低かったです。

問題 4

問題 4 では、全般に小問(1),(2),(3)は基礎的な問題で多くの受験生がよく出来ていたようですが、小問(4),(5)はあまり出来ていませんでした。とくに、小問(4)については細かな点に配慮が足りなく計算を間違えている答案が多かったようです。また、小問(5)では公式に頼って計算し重複している場合の扱いを間違っている答案が多かったようです。むしろ数え上げて調べる方が確かだったかもしれません。

※今回、数学で得点調整が行われました。

◆ 経済学部 後期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

我々は、本小論文の出題にあたって、ふたつのねらいを定めた。一つ目のねらいは、受験生諸君が長文的に的確に把握し、筆者の主張を正確に理解できる能力を持っているかどうかを見ることである。もう一つのねらいは、設問2に体现されているように、問題文で展開されている論理—インセンティブが人間行動に与える影響の帰結—を、具体的な問題設定を行った上で、思考実験できるか否かを見ることである。

<答案の特徴と傾向>

設問1では、「インセンティブ」をキーワードにして、問題文の要約を求めた。問題文のどこを引用すべきか迷ったと思われる受験生の答案も散見されたが、全体としては的確な読解力を示す答案が多かった。

設問2では、民主党政権になって話題になることの多い「高速道路無料化」をインセンティブの観点から考察し、この政策の社会的帰結について論じさせた。話題の問題であるだけに、十分な準備をしていたと思われる答案も少なくなかった。その一方で、情緒的になり、論旨の一貫しない答案も見られた。

◆ 文学部比較文化学科 前期試験（総合問題）

<出題の意図・ねらい>

文学部は、

「人間、文化、社会に関する諸問題を専門的かつ総合的に教育、研究することを通して、時代と地域の要請に応える積極的能力と豊かな人間性をもった人材を養成し、文化と社会のさらなる発展向上に貢献することをめざす」

という高邁な理念を掲げて、

(ア) 多様な学問分野の独自性、専門性を生かしつつ、必要に応じてそれぞれの専門分野が横断的に結びつく柔軟で学際的、総合的な教育、研究を行う。

(イ) 急速な国際化に直面する時代の要請に応え、比較文化学をひとつの柱として、日本文化を見据え、異文化を正しく理解し、世界に対して積極的に提言できる国際人を養成する。

(ウ) 情報化、価値の多様化に直面する時代の要請に応え、人間関係学をひとつの柱として、人間と文化と社会の相互関連を踏まえ、現代社会の問題を総合的に把握できる人材を養成する。

(エ) 人材養成と研究の成果を踏まえ、人間の営みに対する広く深い理解と実践をもって地域社会に貢献する。

人類の文化の継承と調和ある共存に寄与し、真に新しい文化創造の担い手となる、深い専門知識と広い教養を具え、かつ倫理性にも優れた人材を育成すること

——という具体的な教育目標を掲げています。

また、

「文学部 アドミッションポリシー——文学部が望む学生像として——」は、

「文学部における教育は、人文学の名のもとに、思想、言語、文学、歴史、行動、さらに現代文化に関わって展開されてきた諸学の成果を学生に教授し、共に学び考えながら、新たな知的価値を創出することをめざしてなされるものです。そこでの活動には、単に文系の範疇に含まれるものだけではなく、高度な数学的方法や実験的手法、また情報処理の技術を必要とするものもあります。文学部は、人文学の諸学問に関して、こうした幅広い能力を具え、かつ深い教養と倫理性にも優れた人材を育成することをめざしています。そのために求められる学生は、過去から、現在に至り、さらに未来にまでのびる人類の営みについて、様々な角度から関心を寄せ、柔軟な思考力によって問題を発見し、その解決のために、論理的に、また歴史的に、創造性豊かな考察を展開することのできる能力をもつ者であることが望まれます」と述べています。

問題 I 【全体の意図とねらい】

グローバル化した現代社会において、現代人は必然的に世界の多様な価値観、ライフスタイルと関わってきます。比較文化学科では、国際化が急速に進展してきている今日、さまざまな国々の思想、宗教、歴史などの文化的理解が重要であると考え、「日本文化を見据え、異文化を正しく理解し、世界を視野に置いた国際人」の育成をめざしています。比較文化学科では、異文化を正しく理解するとともに、日本文化を世界に向けて発信し、文化の交流をすすめていく必要があるのです。そのためには、文化へ多角的なアプローチができて、ボーダーレス時代の知性をもった学生が望まれます。

必然的に、比較文化学科の入試問題はそのような学生を選抜するのが【ねらい】となります。2011年度の入試問題（前期）問題 I は「文化とは何か」というテーマを扱った英文から出題しました。《文化は「物質的文化」と「非物質的文化」に分かれる。一般的に、着物や日本的建築物など物質的な文化は分かり易い。しかし、異国の慣習や宗教や伝統などの、目に見えない、非物質的文化を理解することは難しい。そして、異文化理解の齟齬が起こるのはしばしばそういった領域である。》と著者はいいます。そしてその例として著者

は二つの例を挙げています。

一つは、中国の大学で日本人留学生が起こした事件であり、もう一つは、仏教国タイで起きた仏像に関する事件です。

様々な文化を理解しようとする際に求められるのは、【柔軟な思考力】です。柔軟な思考力を試すことが出題の意図でもあります。

また、【語彙力】と【文法】については、単なる知識としてのみならず、前後の【文脈】から【推測する力】を求めています。全体的に、長文を筆者の【論理】を追って読み取る力、さらに理解したものを簡潔にまとめ、かつ説明する【文章力】を試しています。

問1 【語法・英文読解力・文章を整理しまとめる力】

“This” が指す内容を文脈から推察し、語法的に正しく理解し、日本語に訳し、重要なポイントをまとめる力を試した。

問2 【選択問題・語彙力・文法力・文脈を読み取る力】

語彙力と文法から推察して、前後の文脈から（2）の語の意味を正しく予測する力を試した。

問3 【英文読解力・日本語の文章力】

Material culture の内容を正しく理解して、日本語に直してまとめていく力を試す問題である。

問4 【選択問題・文法力・文脈問題】

前後の文章から空欄に当てはまるもっとも適する語彙を想定できるかどうかを試した。とくに、文章が一見肯定文に見えるが、実は否定文であることに気づく文法力の問題であるだけでなく、前後の文脈を理解しないと最適な語を選択することはできない問題である。前文の kimono の比喻表現を読み解いた上で、対応している Japanese flag の文章が実は否定文であることに気付くことができるかどうかの考える力を試した。

問5 【記述問題・文法力・読解力問題】

Non-material culture には “Observable” なものと “Non-observable” なものとの二つのタイプがある。この前文を理解した上で、それに相当する英文を日本語に訳し、キーワードを中心にまとめる力が試される問題である。

問6 【英文和訳・文法力・読解力問題】

前後の文脈から何が英文のポイントかが読み取れば簡単に訳せる問題である。しかし、一見易しいこの手の問題は意外と誤って訳す人が多い。全体の文章の流れをつかまずに、この一文だけを訳そうとすると墓穴を掘る場合が多い。

問7 【英文読解力・日本語文章力問題】

語彙力と読解力を試し、日本語の文章力を試す問題である。

問8 【語法・英文読解力・文章を整理しまとめる力】

前後の文脈の中から “This” が指す内容を語法的に正しく理解し、正しい日本語に訳し、重要なポイントをつかんでまとめる力を試す問題である。

問題Ⅱ【日本語読解力・英語作文能力】

英作文は、英語の単語や英文法を知っているだけでは書けない。日本語の文章はそのまま英語に訳すことはできない。日本語文を、いったん、英語の構文に似た日本語文に変える必要がある。その作業を怠って、直接英文を日本語に訳そうとすると、へんてこな英文にしかならない。英語の語彙や英文法や英語構文の力だけでなく、日本語を英語のような構造へ変換する力が必要である。

問題Ⅲ【読解力・日本語文章力問題】

問1【漢字の書き取り】

奇抜な熟語ではなく、日常的に使用されている単語を、正確に理解しているかどうかを問うている。

問2【語句・慣用表現の意味】

平易な日常的に使用されている言葉の意味を、正確に把握しているかどうかを問うている。単なる言葉の意味だけではなく、文脈を読み取る能力も試すものである。

問3【表現の意味の把握】

問題文中の表現を、文脈に即して正確に把握できているかを問うている。

問4【記述の把握とその説明】

問題文中の表現の意味を把握し、それに対して自分の言葉で説明ができるかどうかを問うている。字数制限の問題にはせず、解答欄に示されているスペースに考えをまとめて適確に記述できるかどうかを試すものである。

問5【文意の把握】

単なる問題文中の記述の把握ではなく、全体を把握したうえで、設問の文意が捉えられているかどうかを問うている。

* 入試問題の修正

2頁、13行の“Gregory Goodmacher”は、“Gregory Goodmacher 他”に修正する。

<答案の特徴と傾向>

問題Ⅰ

問1

前文の「identical」を訳出できた答案は10%程度であった。また文中末尾の「they do with other groups」が「have more in common with ~ than they do with ~」の構文の一部であることを理解できていないため「they do with other groups」を誤訳した答案が多かった。全体として個々の単語の翻訳のみならず、日本語として意味の通じる訳文になっているか確認してもらいたい。

問2

正答率はよく、85%程度であった。

問3

「物質文化とはどのようなものか」との問に対して、その抽象的な特徴として「国を特定化しやすい」、「分

類が簡単」などとする不適当な記述が目立った。「refer to」を「指す」でなく「言及する」、「clothing」を「衣服」でなく「布」、「art」を「芸術（作品）」でなく「絵画」などとする文脈全体を把握していない訳語も多かった。

問4

正答率は65%～70%程度。イ、エを選択した解答が目だった。

問5

見える／見えないという対比について理解できている答えは多かった。行動／信念の違い、あるいはそれに付随する事例の提示という点にまで対比が及んでいることが明確にかつ全体的に理解できているかどうか重要なポイントであった。単語の訳の間違いで減点された答えが目立った。

問6

大意は大体つかめていたが、cross-cultural problems の訳に苦労したようだった。

問7

おおむね英文の内容は理解できている解答が多かったが、誤字脱字のために減点されるケースもかなり目立った。

問8

和訳そのものは難しい内容ではなく、全体的によくできていたが、this が何を具体的に指しているかについては、正確に記述されていない答えが目についた。

問題Ⅱ

(1) 「持ち運ぶ」を carry over や carry on、「スーツケース」を suit case にするなどの細かいミスが目立った。また「一瞬たりとも持てない」のニュアンスが出せていない解答も多かった。

(2) 基礎文法に関する理解不足が目立った。目立った誤答例を挙げると、複数の動詞の連結、複数の助動詞の連結、to 不定詞の後に助動詞を続ける、動詞の後に助動詞を続ける、述語が助動詞のみで構成されている、などがあつた。

(3) 三人称単数の s の付け忘れや、easy を動詞として用いるケースなど、基本的なミスが目立った。「～してもらおう」や「開け閉めしやすいように」の部分のニュアンスをうまく訳出できていない答えが多かった。

(4) 英語構文を暗記していない受験生が多かった。日本語をそのまま英語に訳している人も多かった。障がい者や高齢者などの難しいことばをより易しい英語で表現するテクニックを身につけてほしい。

問題Ⅲ

問一

平易な漢字の書き取りなので、誤答は多くはないが、⑤を「混」に誤っているのが目立つ程度。③で曖昧な書き方をしているものがあつた。

問二

5問中 (B) を㊶「仲良くする」とする誤答が非常に多い。

問三

これもほぼ正解が大半。誤答は㊶が大半。

問四

筆者が傍線部にあるように言う理由を問う問題であった。ポイントは、「逆説的な言い方をすれば」という言い回しを筆者がしている理由を理解できているかどうかにある。個人と社会との関係について、どのあたりが「逆説的」なのかが意識されている解答は高得点であった。大半の解答は、傍線部をそのまま言い換えているものが多く、説明として不足していた。また、「甘えの構造」について、土居の論の概説をそのまま引用し、「未熟な自我」としてかつての日本社会の構造を説明しているものも多かったが、筆者の論によって「未熟な自我」という理解そのものが相対化されているからこそ「逆説的」なのであり、この「未熟な自我」を無条件に用いているものは配点が低くなった。

問五

2つともほぼ正解。

◆ 文学部人間関係学科 前期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

本文は、東浩紀著『動物化するポストモダン—オタクから見た日本社会』と、その英訳版（J.E.Abel と S.Kono による翻訳）の一部である。前半（主に英語で書かれている部分）はいわゆる「オタク」と言われている若者たちの虚構重視の態度について述べた部分である。ここで重要なことは「オタク」たちの虚構重視の態度が、現実と虚構の区別ができなくなった結果ではないということが理解されているかどうかである。

後半（日本語で書かれている部分）は「おたく」たちの行動が「大きな物語」の失墜を背景にしていることが語られている。伝統に支えられた「社会」や「神」が失調した空白をサブカルチャーで埋めようとしていること、およびその理由が十分理解できているかどうかを文章理解のポイントとなる。

問1

- (1) 「おたく」という言葉が表す、帰属すべき集団としての **this kind of territory** を持っていなければ精神的に安定しないことの理由が、文章1のなかから正確に拾えているかが問われる。
- (2) 文章1のなかでこの **such a conclusion** が適切ではない、とされている理由を理解していることが前提に、前の文をしっかりと理解できているかどうかを問うている。この部分は文章全体の中核でもある。
- (3) ここでも「オタク」たちの虚構重視の態度が、現実と虚構の区別ができなくなった結果ではないということを理解されているかどうかを前提となる。その上で、現実ではなく虚構の価値規範の方が「有効」である理由が、彼らの人間関係に関して、そしてそれをつなぎとめる社会的価値に関して理解されているかがポイントとなる。

問 2

「虚構重視の態度」が現実と虚構の区別ができなくなった結果ではない、また「オタク」たちが社会性を拒否してわけではない、ということをもふまえているかどうか、まずは前提となる。その上で著者は、このような態度を持つ理由として、「オタク」たちが人間関係を円滑に取り結ぶのに現実ではなく虚構の価値規範の方が「有効」であることを上げている。これをふまえつつ、人間関係を円滑に行うために「ネタ」を探す現代の若者の日常を取り上げて説明してもよい。またこれとは別に、「虚構」を「虚構」と知りつつ消費することが一般的になっていることをテーマパーク等の例を使って説明することも可能である。

「大きな物語の失墜」を乗り越える策については、失墜の社会的原因を問題文から理解しているかどうか問われる。その上で、現実的、論理的な行動様式の可能性が上げられていれば、その方向性は自由である。「大きな物語の失墜」を現実的に受容し、社会的な「物語」を追い求めることをしないという解決法も、論理的であればよしとする。

<答案の特徴と傾向>

問 1

- (1) "this kind of territory"を持っていなければ精神的に安定しないことの理由について、多くは「父親や国家の権威が失墜したのち、それでも帰属すべき集団を探さねばならないから」の部分を用いて回答できていたが、そのなかには英語の読解間違いで減点されるものが目立った。
- (2) "such a conclusion"の意味について、「おたくの、現実よりも虚構を重視するという態度の観察から、おたくは現実と虚構を区別できないと結論づけること」と正しく答えられた学生は2割程度であり、この「虚構重視の態度」と「現実と虚構の区別ができないこと」の二つの関係を正しく理解していない学生が多かった。
- (3) オタクが現実とフィクションとの違いが分別することができない訳ではないという前提を理解していること、②また、彼らが社会性を志向していない訳ではないということ、③そして彼らの社会性への志向が、フィクションを共有することで成立し、かつその理由が、社会における「大きな物語」の喪失にあること、以上が理解されているかどうかを見た。
- ①を誤解している解答もあったが、少数だった。②を誤解している、あるいはそこへの言及がない解答が3割程度あった。もっとも多かったのは③への言及がない解答である。①②③をスムーズに結びつけている解答は少なかった。

問 2 (小論文)

大きな物語の失墜の意味は概ね理解できていたようだが、それを乗り越える行動様式の可能性について提起できた答案は少なかった。

また、オタクたちの虚構重視の態度が現実と虚構の区別が出来ないためではなく、虚構の方がコミュニケーションやアイデンティティの獲得にとって有効であるためであるという本文の趣旨が理解されていないため、オタクと並べて、ニートやひきこもりの例をあげて「現実からの逃避」と捉え、その解決法を述べているような答案も見られた。

漢字のミスによって減点される答案があり、それによって減点される答案もあったので、注意されたい。

◆ 文学部比較文化学科 後期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

問題Ⅰ

日本の外国語学習に見られる問題点を論じた文章を出題した。

問1

提示された文章から重要点を読み取る読解力、設問に的確に答えるために読み取った内容を要約する思考力、それを整った文章で表現する文章力を問う問題である。

問2

筆者が提示した問題点を踏まえた上で、効果的な英語学習の案を書かせる問題である。受験者にとっても身近な問題の改善方法について深く考え、それを説得力のある論理的文章で表現できるか、思考力と文章力を問う問題である。

問題Ⅱ

川柳をキーワードとして、自由にエッセイを書かせる問題である。「余生」、「淋しい」といった短い言葉の意味の深さを敏感に感じ取り、そこから自由な発想で自らの思考を展開する能力があるか、またそれを的確に伝える表現力・文章力があるかを問う問題である。

<答案の特徴と傾向>

問題Ⅰ

問1

外国語学習の問題点が大きく見て二つ提示されているにもかかわらず、文章の前半のみあるいは後半のみで論じられる問題点を要約している解答がかなり多かった。また、提示された文章の内容を全く無視し、自分の意見のみを書いた解答も一部にあった。

問2

筆者の論を正しく踏まえていない解答や全く無視した意見を述べたものがあった。また、論旨が一貫していない意見を述べた解答があった。「筆者の論」の踏まえ方と「あなたの考え」の着想を結びつける構想力が必要とされる問題であったが、その点においてバランスのとれた解答が少なかった。

問題Ⅱ

川柳の意味内容を十分に踏まえず、少子高齢化や自殺者増加、孤独死などの社会問題について、自身の意見や感想を述べているものが多く見られた。また、エッセイというスタイルの問題であったにもかかわらず、議論形式の記述になってしまっているものが見られ、残念であった。ただし「余生」という漢字から表現への関心を広げ、そこから話題を展開するなどの工夫がみられる答案もあり、普段から文章・表現への興味関心を抱いているかどうか、こうした問いについて重要なポイントになることがはっきりとした。

◆ 文学部人間関係学科 後期日程（集団面接・グループ討論）

<面接の意図・ねらい>

後期試験では、特定のテーマに基づいた集団面接を行なっている。

そのなかでは、①一つの問題を「常識」にとらわれない視点から、あるいは多面的に捉えて表現していく力、②一つの問題について、集団で多面的に、あるいはより深く探求していけるようなリーダーシップの力、などを見ていきたいと考えている。

<受験生の特徴と傾向>

一つの問題について、月並みの賛成意見ばかりが出てきて、討論が深まらない傾向が見られた。問題は必ず複数の側面から捉えられるはずであり、一見すると肯定的にしか見えない問題を異なる側面から捉えることができなかつた受験生が多かつた。

進行を進めるリーダーシップを発揮する学生がいないグループがいなくて討論がうまく成り立たないグループがある一方で、特定の学生が自分のペースで一方向的に司会を進めてしまい、その司会のやり方に大きく影響されてしまうグループもあつた。議論を活性化する上でのリーダーシップは必要だが、自分のやり方を押しつけて、他の受験生の自由な意見を出せなくしてしまうようでは、それは本来的なリーダーシップとは言えないことには十分に気をつけていただきたい。

◆ 法学部 前期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

出題文の出典は、暉峻淑子『豊かさの条件』（2003年、岩波新書）である。

本書は、失業問題、教育問題等を通じて、その解決策を論じている。筆者は、企業も学校も競争原理が持ち込まれ、競争社会の格差を広げることが社会の活性化だと信じられつつあることを批判する。能力給や成果主義に依拠する「少数者の勝利」が重んじられる状況にあって、人々の不安が高まっているという。出題文は、とりわけ日本の子どもの教育について問題を指摘したものである。

経済と社会のグローバル化が著しい今日、いかなる人材を育成すべきかが大きな課題となっている。とくに、天然資源に乏しい日本にとって、人的資源開発をいかに行うべきかということは、これまでも常に問われ続けてきたものである。その意味で、教育はとりわけ、今日我々が直面する問題の中でも重要なものであることは確かである。筆者は、出題文の中で、日本のこれまでの詰め込み式受験競争教育、管理型教育、そして最近の経済活動を立て直すためにさらにそれが強化されていることを徹底的に批判し、子どもの一人ひとりの個性を重視した教育の実践を主張している。

本書で、筆者は10年前ほどの教育事情を前提として描いている。その点で、受験生が目当たりしてきた教育事情と少々異なる部分があると考えられる。ただし、現在と比較して、日本の教育がそれほどその当時と大きく変化したわけではない。少子化によって受験競争のしれつさは低まっているものの、画一的な学級管理、学習指導要領に依拠した管理教育、教育競争の態様はこれまでとほぼ同じである。子どもを取り巻く教育環境の方向付けがいまだ模索されている段階にあるといわざるをえない。「ゆとり教育」が2002年に導入されたものの、その数年後には見直しが行われる等、教育のあり方の方向付けそのものが混迷にある。

そうした背景から、受験生に、これからの日本の教育のあり方、とりわけ教育と競争の課題を考えてもらうことにしたのである。是非、受験生には日本の子どもの教育のあり方について批判的に検討し、自由な見解を展開して欲しい。

<答案の特徴と傾向>

設問は、筆者の見解を要約し、それに対する受験生自身の意見を述べることを求めている。筆者の見解を読解する力が求められると同時に、筆者の見解を十分理解したうえで、自論を展開することが必要となる。

要約については、筆者の見解のポイントを十分押さえられている答案もある反面、要約がとても短い答案、また文章力の不十分な答案がかなり見受けられた。中には、要約がない答案もあった。全体としては、要約力の十分でない答案が多かったといえよう。

一方、受験生自身の意見については、自身の経験も手伝って、比較的答えやすい問題であったと思われる。内容としては、筆者の見解に賛成するもの、筆者の見解に反対するもの、筆者の見解に条件つきで賛成・反対するもの、いずれのパターンでも、自論を説得的論理的によく展開できていた。しかし、中には、論旨が一貫しないもの、あるいは出題文の文章をそのまま引用して自論として展開しているようなもの等も見受けられた。

また、かなりの答案に誤字及び脱字があった。出題文中に表記されている用語にもかかわらず、誤記するものすらあった。

◆ 法学部 後期日程（面接）

<面接の意図とねらい>

法学部では、一般選抜後期日程試験において、面接による選抜試験を実施している。面接を重視している理由は、単にセンター試験の成績のみで入学者を選抜するのではなく、目的意識や社会的問題関心などを問うことにより、勉学への意欲と幅広い素養をもった学生を選抜するためである。したがって、面接にあたっては、①受験生の入学意欲や将来の抱負などを含む志望動機、②法学部学生として必要とされる社会科（公民）の基礎的知識と社会的問題関心及び論理的思考力、③面接試験におけるプレゼンテーションのやり方やコミュニケーションの能力などを評価している。

<受験生の特徴と傾向>

前年度と同様に、面接試験では3問が出題された。第1問目は、従来どおり、本学法学部の法律学科または政策科学科を志望した理由についての問いであった。多くの受験生が事前に予測していたであろうはずの質問でありながら、「法学部一般」についての志望理由を述べるにとどまるものや、入学後の抱負・将来設計との関連づけにおいて不明確なものも見受けられた。なぜ「本学」の法学部各学科を志望したのかを、入学後の抱負・将来設計とともに意欲的に回答する例は、思いのほか、少数であった。

第2問目は、「高速道路の無料化の功罪、メリットとデメリット」について述べさせ、その賛否について受験生の意見を述べてもらうというものであった。本問は受験生の社会的問題関心と論理的思考力などを評価するために、出題されたものである。受験生の多くが本質問について、いずれか一方の立場に固執するあまり、メリット・デメリットについて複数の事項を指摘することができずに、また反対の立場についての批判や自己の立場に対する反論に対して十分に答えることができなかった。

第3問目は、受験生の社会的問題関心とともに、その問題に関連した社会科（公民）の基礎的知識を評価する設問となっている。本問は「2010年7月の参議院選挙後に生じた『ねじれ国会』の問題点」を問うものであるが、その予備的・前提的な知識として「参議院の期待されている役割」、「衆議院の優越」についても併せて質問するものであった。政策科学科を志望する受験生は概ねよく回答していたが、法律学科を志望する受験生においては全体として公民の基礎的な知識が不十分であったように思われる。

最後に、多くの受験生において新聞、テレビなどのメディアで発信されている最近の社会的問題に対する関心およびその知見が残念ながら十分ではなかったように思われる。プレゼンテーションやコミュニケーションの能力の評価以前の問題として、多くの受験生の準備不足、勉強不足がうかがえた。

◆ 地域創生学群 前期日程（小論文）

<出題の意図・ねらい>

今回の試験の出題文は、前年度に引き続き地域創生に関連した文章の中から、次の3点を念頭におきながら選定しました。1点目は、地域創生やまちづくりについて考える上で重要となる「人と人とのつながり」に関連した文章であること、2点目は、一般選抜であることを考慮して一般的かつ平易な文章であること、3点目は、地域創生学群の理念の1つである実習を通して学ぶということの意味について考え、理解することができるような文章であること、という3点です。複数の候補を検討した結果、門脇厚司（2010年）『社会力を育てる——新しい「学び」の構想』岩波書店、および同じく門脇厚司（1999年）『子どもの社会力』岩波書店、の当該箇所が、上記選定基準に鑑みて最も適当であると判断し、出題文として選定した次第です。

今回の出題文では、地域の活性化を考えていくうえで重要となる「社会力」がテーマとなっており、社会力を育てるには地域ほど条件の整った場所はないということが、具体例を交えながら分かりやすく述べられています。したがって、地域創生学群におけるいずれのコースを志望する受験生にとっても、地域で求められる人材のイメージをふくらませることにつながると判断しました。

設問では、①社会力とは何か、②社会力を培うには地域が適している理由、の2点について理解し、その内容をふまえながら、地域創生学群の教育目的について説明することを求めました。言い換えると、①と②の内容が地域創生学群の教育目的と密接に関係しているということが理解できているか、そして、そのことを簡潔にまとめることができるかが求められています。また、当然ですが、論理的思考能力や説得力は、解答文の全体を通じて評価されることとなります。

今回の出題全体を通して、地域創生学群の理念や目的、教育方法を深く考え、理解しているかどうかを問うています。

<答案の特徴と傾向>

上述のように、設問では、まず、出題文全体の内容から、①社会力の概念、②社会力を培うには地域が適している理由の2点について理解すること、次に、設問文等の内容から、③地域創生学群の理念や教育目的・方法について深く考え理解すること、最後に、①～③の関連性を理解した上で、①と②の内容をうまく盛り込みながら③を説明することを求めています。

しかし、①と②に関する説明のみで③について言及していない答案や、③について言及しているものの①もしくは②の説明ができていない答案、出題文の内容に引きずられて③の内容を誤解したまま論述している答案、設問の内容とは関係のない内容に終始している答案なども少なからずありました。当然のことですが、小論文の試験ですから、設問の内容をしっかりと読み込み、設問で求められている内容には全て答えるのが最低限の基準となります。

①と②については、特に読解力が求められており、出題文全体の内容から、「社会を維持・発展させ、その中で人々が幸福で充実した日々を送れるような社会を実現することが、『社会をつくる』ということで、そのような社会をつくるために備えているべき資質能力が『社会力』である」という大筋が理解できているか、そして、「社会力というものが、様々な人たちと良い関係を構築・維持しつつ、人や社会のために自分の持つスキルを進んで発揮・活用することのできる資質能力である。」という点と、「地域には多様で多彩な人々が暮らしているため、その中で、様々な位置を占める人と、様々な機会に、様々な場所で出会いや体験といった相互行為をすることが可能となる。したがって、人とつながり社会をつくるという社会力を培うのに地域が適している。」という点が読み取れているかどうかことが重要になります。その上で、③について、地域創生学群の理念や教育目的を上述の内容と照らし合わせることで、「社会をつくること⇔地域の再生と創造」、「人とつながり社会をつくる力、社会力⇔地域創生学群での教育によって身につけて欲しい能力、実践的な力」、「多

様で多彩な人々との相互行為が可能な地域⇔現場実習のフィールドとしての地域」といったような関連性や対応関係がイメージできるかがポイントとなります。つまり、③については、地域創生学群の理念について、どれだけ深く考え理解できているかという部分が問われていることになります。以上のポイントがしっかりと理解できており、設問で求められた要素に漏れのない答案が求められています。

全体的な傾向として、社会力についてはポイントをしっかりと押さえることのできた答案が多く見受けられました。しかし、社会力を培うのに地域が適しているという理由の部分については、要点が整理できておらず、散漫な内容になってしまった答案や、地域創生学群の教育目的について全く触れていないケースなど、設問で求められた要素すべてを満たしていない答案も少なからず見受けられました。また、地域創生学群の教育目的に関する部分で、子どものための地域づくりという言葉が用いられた答案、つまり、あまり深く考えずに出題文の内容をそのまま用いてしまったことが予想されるような答案も少なからず見受けられました。一方で、社会力を培う必要性の部分まで簡潔にまとめた上で、①や②を上手に引用しながら地域創生学群の教育目的の説明へと論述を展開したようなバランスの良い答案もありました。当然ながら、そのような答案には高い得点がつきました。したがって、設問文に対して忠実に論述することが最低限条件ではありますが、その上で、出題の意図、つまり何が求められているかを推し量った上で論述を展開することも重要になります。

◆ 国際環境工学部 前期日程（理科・英語・数学）

理科（物理・化学）

<出題の意図・ねらい>

【第1問～第3問 物理】

第1問

運動量，力学的エネルギー，力学的エネルギー保存の法則，運動量保存の法則に関する基礎的な知識を問う。

第2問

ピストンシリンダー内に封入された理想気体の状態変化に関する問題で，気体の圧力，理想気体の状態方程式，ボイル・シャルルの法則などの熱力学に関する理解度と応用力を問う。

第3問

電流と磁場，電磁誘導に関する基礎問題。電流が磁場から受ける力，誘導起電力，キルヒホッフの法則，電力，などの知識と理解力を問う。

【第4問～第6問 化学】

第4問

二酸化炭素を題材として，化学全般の知識を問う。

第5問

基礎的な化学製品である炭酸ナトリウムの製法に対する正確な知識や理解度を問うとともに，化学反応式からの物質の量的関係を計算する能力を測る問題である。

第6問

芳香族化合物の構造やその化学反応，性質の理解度を確認する問題である。全体的に有機化合物の化学構造や反応の総合的な理解が求められる。

<答案の特徴と傾向>

【第1問～第3問 物理】

第1問

基礎的な物理知識を確認する問題であったため，全体的に高得点の答案が多く，満点の答案も多くみられた。特に物体がもつ運動量や運動エネルギーを求める問題，運動量保存の法則に関する問題やこれを用いて物体の速さを求める問題，力学的エネルギー保存の法則に関する問題など，基礎的な問題は正答率が高かった。しかし，力学的エネルギー保存の法則を用いてばねの縮みを求める問題の正答率はやや低かった。

第2問

理想気体の状態変化に関する基礎的な問題であったため，満点もしくは高得点の答案が比較的多かった。一方で，ピストンでの力のつり合い式を正しく導くことができなかつたために，正答率が低い答案もかなりあった。小問の中では断熱変化に関する問題の正答率が低かった。

第3問

はじめの4題（セ，ソ，タ，チ）の正解率は高く，あとの3題（ツ，テ，ト）の正解率は低かった。7題すべてに正解している答案が複数あった。誘導起電力を含む回路にキルヒホッフの法則を正しく適用できていない答案が少なくなかつた。

【第4問～第6問 化学】

第4問

問1～問5のような単に知識を問う問題は正解率が高かったものの、問6のような複数の知識を論理的に組み合わせて解く問題の解答率が低かった。また、問6では計算間違いが極めて多く、基礎学力の向上が求められる。問7の正解率も低かったが、これは知識が不足していたためであろう。

第5問

- 問1～3 アンモニアソーダ法に関する物質名と化学式、および化学反応式を問う基本的な問題であり、概ねよくできていたが、原料の一つをNaOHとする誤答が多くみられた。
- 問4 モルの概念と化学反応式の量論比を問う計算問題であり、問1でNaClを答えられたものはだいたい正答であった。計算を放棄している解答も目立った。
- 問5 現象は理解していると思われるが、それをうまく表現できない解答が多く、答えになっていないものが多々あった。例えば、ベーキングパウダーはなぜ膨らむかを問うているのに、「加熱するとふくらむから」、「膨張性」という解答などが散見された。

第6問

芳香族化合物の官能基とその化学反応の理解を問う問題であったが、良くできた人とできていない人に解答の様子がはっきりと分かれていた。

- 問1 おおよそ出来ていた。
- 問2 化学構造とその名前を連動する問題に多くミスが見られた。
- 問3, 4 半分程度の正解者がいたが、有機化学反応の基礎が不足している解答が多く見られた。

英語

<出題の意図・ねらい>

第1問

- 問1 無生物主語の構文および比較級の意味が正しく読み取れているかを問う。
- 問2 文脈を正しく理解し、指示代名詞が指しているものを特定する力を問う。
- 問3 基本的な語彙の知識があるか、文の構造を正しく取れているかを問う。
- 問4 文の構造を正しく取れているか、特に関係詞節を正しく読み取れているかを問う。

第2問

- 問1 無生物主語の構文および接続詞が正しく読み取れているかを問う。
- 問2 仮主語を用いた構文および関係詞節を用いた構文が正しく取れているかを問う。
- 問3 文脈を正しく理解し、下線部が本文中のどのような事実を指しているかについて把握できているかを問う。
- 問4 前後の文脈から、適切な語彙を特定する力を問う。

第3問

事実について、平易な英語を用いて記述する力を見る。特に語彙や構文の適切さ、文法的な英文を書く力を問う。

<答案の特徴と傾向>

第1問

- 問1 無生物主語構文の目的語 us を補語に対する意味上の主語として訳出している答案は全体の 2～3%程度で、Internet を主語とする直訳に近い答案がほとんどであった。和訳の誤りで最も目立ったのは、bring together を「(インターネットが) 身近なものになった」とした解答で、「利用者間の物理的な距離感を縮めた」と正しく解釈したものは全体の2割以下にとどまった。比較級の解釈自体は正しく理解しており、この部分だけの正答率は70%を超えるものと思われる。
- 問2 It の解釈で様々な誤答があった。その中には直前の translate (翻訳する) という語の意味がわかっているのか、と疑いたくなる答えも多々見られた。
- 問3 全体的に良くできていたが、translation, specialists などの単語をカタカナ表記している答案が散見された。また漢字の間違ひが多く見られた。
- 問4 非制限的關係節 “.... ,which blocks the flow of the translation” を訳出できていない答案が数多く見られた。

第2問

- 問1 無生物主語構文の解釈は6割以上の受験生が正しく訳出できていたが、puzzle という動詞の意味を正しく理解できていない答案が全体の1割程度あった。また、unless 以下の和訳では、代名詞 it の指示内容を前文の my heart と解釈した答案が全体の3割以上もあり、直前の anything と正しく関連づけた解答は約50%に過ぎなかった。その他、because 以下の副詞節の解釈について、否定辞 not の適用範囲を anything のみならず unless 以降まで含めてしまった誤訳が散見された。
- 問2 例年のように、語彙の解釈の誤り (warmth を worm) は見られたが、構文は概ね取れていた。しかし主語の it を「愛」で取ったり、seem to me を「思った」、beautiful を「すばらしい」などの誤解釈が多かった。また「～みたい、～ようであった、～の他に」などの曖昧さを助長させる解答も散見された。
- 問3 下線部の直後のエピソードについて説明している答案が散見された。また、下線部の1行前に戻りその内容を把握はおおよそできていたとしても、the word が何を指すかについてまできちんと説明できている答案は少なかった。
- 問4 空欄(B)に “know” と記入している答案が相当数見られた。

第3問

全学科を通して、単語のスペルミスが非常に目立った。また構文では、特に受動文の誤りが目立っており、正しく使用できた答案はひとつもなかった。しかし、ほとんどの受験生がこの英作文の問題に取りかかろうとした努力は評価できる。

数 学

<出題の意図・ねらい>

第1問

2次関数，方程式と不等式，場合の数と確率，三角比に関する問題。それぞれについて基本的知識が身についているかを問う。

第2問

数学Ⅱ，数学Bの基礎力を確認する問題で，2次方程式の解，円と直線，三角関数，指数関数，数列を出題している。

第3問

微分法と積分法に関する問題。微分を用いて接線の傾きを求める，あるいは，積分を用いて図形の面積や体積を求める基本的な問題。微分法と積分法の基礎が身に付いていることを確認する。

第4問

行列に関する問題。行列を用いた座標平面上の点の変換，行列と連立一次方程式の関係，逆行列の特徴などについて知識を問う。

<答案の特徴と傾向>

第1問

基本的な問題であり，いずれの問題も正解率が高かった。問題ごとに比較すれば，問題(4)のうち確率の計算，問題(5)の集合の要素の個数の計算については正解率がやや低かった。

第2問

問題全体の正解率は予想通りであり，基礎力を確認できた内容といえる。

- (1) 正解率が高かった。満点の答案が多くみられた。
- (2) 正解率は低かった。比較的計算量が多い問題であり，途中で間違えたためか，満点の答案は少なかった。
- (3) 正解率はやや高かった。 $\sin x$ の値を間違えたと思われる答案が多かった。
- (4) 正解率はやや低かった。片方を間違えて答えている答案が多かった。
- (5) 正解率はやや高かった。一般項の正解率が高かったが，初項から第 n 項までの和の正解率は低めであった。

第3問

- (1) 微分を用いて接線の傾きを求める問題。比較的よくできていた。接線が直交するので，接点の x 座標を x_0 とすると， $ax_0^2=-1$ とするべきところを $a=-1$ とする誤答が多かった。
- (2) 積分を用いて図形の面積を求める問題。比較的よくできていた。
- (3) 同じく積分を用いて立体の体積を求める問題。あまりできていなかった。 x 軸の周りに1回転してできる立体の体積を求めている誤答が多かった。

第4問

行列の操作やその意味について理解が不十分な解答が目立った。

- (1) 二次元平面上の相似変換である。この問題については、正答率が比較的高かった
- (2) 行列と連立一次方程式の関係をもとに解く手法を期待した。しかし、この手法を使った解答は、あまりみられなかった。また、用いる手法にかかわらず、計算間違いが多くみられた。
- (3) 逆行列を持たない条件は、多くの受験者が理解していたが、その先の手順において(2)と同様の課題がみられた。

◆ 国際環境工学部後期日程（数学）

■機械システム工学科（第3問選択A, B, Cの中から2問選択）

■情報メディア工学科（選択）

■環境生命工学科（選択）

<出題の意図・ねらい>

第1問（第3問 選択A）

- (1)～(2) 2次多項式に関する基本的な演算能力を問う設問である。
- (3) 2次関数に関する基本的な知識を問う設問である。
- (4) 三角関数に関する基本的な知識を問う設問である。
- (5) 順列・組合せに関する基本的な知識を問う設問である。

いずれも基礎能力の確認を狙っており、正確かつ迅速に解答することを期待する。

第2問（第3問 選択B）

直線、平面および直線と平面の交点に関する設問である。高度な発想や知識を問う問題ではなく、ベクトルに関する基本定理の理解と正確かつ迅速な計算能力が要求される問題となっている。

第3問（第3問 選択C）

- (1) 絶対値、三角関数の基本性質と三角関数積分に関する理解度を確認する。
- (2), (3) 関数の最大と最小を求める問題であり、三角関数の性質、関数の増減、極大、極小などに関する理解度と計算力を確認する。

<答案の特徴と傾向>

第1問（第3問 選択A）

- (1) 多数の解答において正解が得られていた。間違いの場合も単なる計算ミスと思われる。
- (2) 2次方程式が異なる解を持つ k の範囲を求める場合に、符号が逆であったり、等号がはいってしまっていたり、不注意と思われるミスがいくつか見られた。
- (3) 多数の解答において正解が得られていた。ただし、間違いは計算ミスではなく、2次関数に関する問題の演習不足によるものと思われる。
- (4) 比較的多く正解が得られていたが、余弦定理を記憶していない間違いが見られた。
- (5) 第1問の中では、比較的多く間違いが多かった。間違いは計算ミスではなく、数え上げに対する基礎の不足によるものと思われる。

第2問 (第3問 選択B)

ベクトルの基礎、直線と平面の方程式、直交と内積など、基礎事項の理解度は比較的高かったが、基礎公式を駆使して連立方程式を導く過程でかなりのミスが見られた。

第3問 (第3問 選択C)

(1)絶対値のついた三角関数の定積分問題である。正解率はやや高かったが、三角関数の性質を用いて絶対値を取り除く計算ミスがあった。

(2)三角関数が含まれた関数の最大値を求める問題であり、導関数、導関数に基づいた関数の増減に関するミスが散見され、正解率はやや低かった。

(3)絶対値のついた三角関数の最小値を求める問題であり、関数値の符号と関数の増減に関するミスが目立ち、正解率は低かった。

◆ 国際環境工学部後期日程 (物理)

■機械システム工学科 (第1問, 第2問)

■情報メディア工学科 (選択)

■環境生命工学科 (選択)

<出題の意図・ねらい>

第1問

力学的エネルギー、力学的エネルギー保存の法則、摩擦力、物体の運動に関する基礎的な理解力を問う。

第2問

理想気体の状態変化を題材として、気体の内部エネルギー、気体の仕事、熱力学第一法則などの基礎的な理解度と応用力を問う。

第3問

電流と磁場に関する基礎問題。ホール効果の現象をとおして、荷電粒子に働く力、電位差と磁場、電流の定義、などの知識と理解力を問う。

<答案の特徴と傾向>

第1問

基礎的な物理知識や理解力を確認する問題であったため、全体的に高得点の答案が多くみられた。物体がもつ力学的エネルギーを求める問題、力学的エネルギー保存の法則を用いて物体の速さを求める問題、摩擦力を求める問題、摩擦により失う力学的エネルギーを求める問題など、基礎的な問題の正答率は高かった。しかし、物体の放物運動に関する問題の正答率はやや低い傾向があった。

第2問

標準的な問題と考えていた理想気体の状態変化に熱力学第一法則を適用して仕事や熱量を解く問題の正答率が予想以上に低かった。そのため正味仕事と熱効率の正答率はさらに低かった。

第3問

正解率は「中程度～低い」だったが、10題すべてに正解している答案が複数あった。「ナ」を電磁誘導と答えている答案が多かった。また、「ヒ」に電流が磁場から受ける力を答えている答案が散見された。

◆ 国際環境工学部後期日程（化学）

■ エネルギー循環化学科

■ 環境生命工学科（選択）

<出題の意図・ねらい>

第1問

元素の基本概念から、熱化学、活性化エネルギーなどの化学の基礎能力を問う問題を出題した。

第2問

反応の量的関係について、物質収支に着目して化学反応式を解く基礎能力を問うた。また、電離平衡式の基礎知識をもとに、対象のイオン濃度を電離定数と水素イオン濃度を用いて一般的に表す応用能力を見る問題である。

第3問

化学平衡と気体の性質を問う問題と化学反応での物質収支を問う問題である。平衡時の化学反応の状況を正確に把握しているかどうかを評価する。同時にボイル・シャルルの法則の理解と応用の能力を問う。

<答案の特徴と傾向>

第1問

原子の構造、化学熱力学などの基礎的な事項については大旨理解できている解答が多かった。燃焼熱についての単位の間違が多く見うけられた。

第2問

基礎能力を問うための設問（元素・電荷の収支から化学反応式の係数を得る）では、いずれの受験生も一定の水準を満たしていた。ただし、係数の答えが分数となる設問では計算ミスが目立った。

一方、応用力を問うために設問を文章中心とした場合、根本的に誤った解き方で電離平衡を計算する解答がかなり多かった。受験勉強では単に計算問題を解くだけでなく、自らの思考力を高める取り組みが必要である。

第3問

計算問題などは正解が多かったが、化学平衡や気体の性質を文章で問う問題では、答えとして不十分な記述が非常に見多かった。

化学現象を基礎から十分に理解する勉強を期待する。

◆ 国際環境工学部後期日程（生物）

■ 環境生命工学科（選択）

<出題の意図・ねらい>

第1問

遺伝情報とタンパク質の合成に関して、基礎的な理解力を問うことを意図としている。

問1 遺伝子の構造と複製に関する記述文を完成させる、基礎問題である。

問2 DNAとRNAの違いを理解しているのかを問う問題である。

問3 DNAの分子構造に関する説明問題である。

問4 遺伝子情報の転写に関する説明問題である。

問5 タンパク質合成に関する説明問題である。

第2問

神経系の基礎知識を問う問題である。

問1 ヒトの生命活動の中枢が脳のどこにあるのかを問う問題である。

問2 脊椎動物における中枢神経系と末梢神経系に関する基礎知識を問う問題である。

問3 自律神経系である交感神経と副交感神経のそれぞれの役割を理解しているかを問う問題である。

問4 交感神経と副交感神経による臓器調節を問う説明問題である。

問5 集中神経系と散在神経系の違いを問う説明問題である。

第3問

生命の起源に関して、基礎的な理解力を問うことを意図としている。

問1 地球誕生に関する問題。

問2～3 生命の誕生に関する基礎知識を問う問題である。

問4～5 地球環境の変化と生物の進化に関する基礎知識を問う問題である。

問6 真核生物の誕生に関する説明問題である。

問7 生物の陸上進出に関する説明問題である。

<答案の特徴と傾向>

第1問

問1から問4は遺伝情報に関する問題であったが、理解度が高く、正解率が高かった。

問5はタンパク質合成に関する説明問題であったが、名称は正解率が高かったが、働きについては十分に説明できていない解答が目立った。

第2問

問1の脳における中枢の位置を問う設問にはよく答えられていたが、問2の神経系の間には理解が不十分な解答が目立った。問3および問4はよくできていたが、問5の散在神経系を正確に理解していた解答は少なかった。

第3問

問1から問5は、基礎的な問題である。教科書をよく理解していれば解けると予想していたが、二酸化炭素と酸素を取り違えた記述をしている解答が見られた。化学進化に関しては、比較的よくできていた。問6は、真核生物の誕生に関する問題である。ミトコンドリアと葉緑体の起源に関して正確に記載している解答は少なかった。問7は、生物が陸上に生活圏を広げるには、紫外線を吸収するオゾン層が生まれることが必要であることを問うた。比較的よくできていた。

◆ 国際環境工学部後期日程（面接）

■ 建築デザイン学科

<面接の意図・ねらい>

はじめに4～5名を1グループにして20分程度のグループ面接を行った。

- ・集合住宅と戸建て住宅に住む場合のメリットとデメリットに関する質問
- ・他者への意見に関する質問

などに対し、回答を求めた。

次に10分程度の個別面接・口頭試問を行った。

- ・長所・短所に関する質問
- ・好きな建築に関する質問
- ・本学科の教育目的・内容の特徴や特色などの理解度および学科への適合性を確認するための質問
- ・数学、物理、化学、国語、英語に対する理解度を確認するための質問

などに対し、回答を求めた。

<受験生の特徴と傾向>

グループ面接では、集合住宅と戸建て住宅のどちらに住みたいかはほぼ半数であった。他者の考えに対して自分の意見をきちんと言える受験生とそうでない受験生がいた。個人面接では、自分の長所・短所についてはほぼきちんと回答があったが、質問に的確に回答のできない受験生もあった。好きな建築については多様な回答があった。なお、ほぼ全員が、本学科の特徴や教育内容を調べてきており、本学科で学びたいという意欲が感じられた。数学等の理解度に関する口頭試問では、受験生がほとんど正解の質問もあったが、非常に正答の少ない質問もあった。また、最も基礎的な質問に回答できない学生もあり、受験生の中に差が見られた。

平成 23 年度入試の出題の意図、採点総評 < 推薦入試 >

◆ 外国語学部英米学科 推薦入試（全国：面接）（地域：小論文）

I 全国推薦

< 出題の意図・ねらい >

1. 英語による質問については正確に解答できるかを問う。
また、英語での伝達能力も評価する。
2. 解答内容については、独自の考えと文化的知識が含まれているか、また、今後の英語スキルの上達を目指すモチベーションと具体的な目的があるのかを評価する。

< 傾向 >

すべての受験生がかなり高いレベルでの受け応えをすることができた。
中には話すことに慣れていない学生もいたが、面接者が驚くほど流ちょうな英語で、高度な内容の質問に正確に答えることができる学生もいた。具体的で込み入った内容の質問に対しても、ほぼ全ての受験生が適切に答えることができた。

II 地域推薦

< 出題の意図・ねらい >

日常の学習の成果を問い、英米学科での勉強の基礎的領域を習得しているかをみることが出題の狙いである。具体的には、内容の理解には、表現を通して主張内容等を自分なりに再構成できるか、また、自分の主張を述べるときは、「わかりやすく、簡潔に、要領よく」
一定の形式に従って表現できるかを英語・日本語を通して問うている。

< 答案の特徴と傾向 >

- 問題 1 ①英語の読解力、②要約する際の構成力で答案に差がついた。
問題 2 「for example」がキーワードで答案に差がついた。
問題 3 ①適確な訳語の選択と②日本語文の読み返しが差となっている。
問題 4 ①英作文力②設問に対してきちんとした答えが出来ているかどうかで差がついた。

◆ 外国語学部国際関係学科 推薦入試（小論文）

< 出題の意図・ねらい >

近年の日本人学生による海外留学事情に関する新聞記事（英文および日本文）とデータを資料として取り上げた。問 1 では、英文の読解力および内容の理解力、さらにそれを日本語で的確にまとめる表現力を問うた。
問 2 では、統計データを含めた 4 つの資料から、テーマに関するデータを読み取り、整理した上で、論理的に叙述する能力を問うたものである。英文読解力および論理的思考力・表現力を中心として、国際関係を学ぼうとする学生の資質を問う内容となっている。

<答案の特徴と傾向>

問 1

問 1 では、問題文（英語）を 500 字以上 600 字以内の日本語で要約することを求めた。問題文の英語は難解なものではなく、多くの受験者は問題文の主旨を概ね理解した上で解答にのぞんでいたと言える。しかし、要所での数値や情報の読み間違いが見られるとともに、話題の流れを正確に把握し表現するという面では不十分な解答が多く見受けられた。海外への日本人留学生数減少の問題提起に始まり、アメリカ合衆国への留学生数が特に減少していること、海外から日本への留学生数低迷も危惧されていること、海外への留学生数が減少した理由として若者の内向き志向や環境の影響が指摘されていることに言及する必要がある。

問 2

昨今における日本人学生の海外留学の傾向について、問題文と資料①～④のデータからは、変化の期間（長期的変化、短期的変化）、留学先などの観点から、異なる諸相をうかがうことができる。その違いを読み取り、整理した上で論述する力を問うた。

しかし、ほとんどの解答は、異なる諸相を読み取れていなかった。特に、問題文について、その分析視角や論点の特徴を考えることなく、趣旨を無批判に受け入れた解答が多かった。また、資料のデータとは明らかに矛盾することや、導出できないことを「データから読みとれる実態」として記述している解答も見られた。さらには、設問で明示しているにもかかわらず、事例やデータを全く読み込まずに既存の知識だけで持論を展開したり、自分を取り巻く社会が悪いというような観点から政策提言的な「べき論」に終始したりする解答も散見された。

国際関係を学ぶ上では、自分の先入観を一度棚に上げ、客観的に資料を読みこなす力が重要である。その力は、情報が溢れている一方で、単純な結論に画一的に到達しがちな今日の社会状況において、自分なりの見方を確立する上でも非常に重要なものであり、またその力こそが、国際関係を学ぶ上で求められる資質でもある。

◆ 経済学部 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

須永晃子『リアル・オーガニック』（グラフ社、2008年）の一部から出題した。問題文は、現代人の食生活、「従来のオーガニック」と「リアル・オーガニック」、食にまつわる環境問題について論じたものである。

問題文を読んで、従来のオーガニックと「リアル・オーガニック」の違いが理解できたか、また「リアル・オーガニック」を実現するためには、どのような取り組みを具体的に考えればよいか、さらに、それらを文章でどのように表現できるかを問うた。

<答案の特徴と傾向>

問1

「食の外部化・孤食化・工業化」についてそれぞれ具体的に説明できるか、また、それらの背景、原因を説明できるかなどについての、読解力、常識力を問う問題である。この設問に解答するためには、問題文の言葉を拾い上げて解答するだけでなく、受験生のこれまでの食生活、経験などを通じて、「食の外部化・孤食化・工業化」とはどんなものなのかをイメージし、自分の言葉で説明することが重要になる。

上記の点を満たした上で、「食の外部化・孤食化・工業化」についてそれぞれを具体的に説明し、それらの背景を解答した答案は予想外に少なかった。

問2

「リアル・オーガニック」について説明し、「リアル・オーガニック」社会を実現するためにはどんな取り組みがあるかについての、読解力、常識力、および思考力を問う、設問である。

問題文を読み、「リアル・オーガニック」とは、確固たる信念を持って、自分だけでなく、他人や社会、環境にも配慮して、生産・消費活動を行う生活様式だと理解することが答案を書くときの重要なポイントになる。また、リアル・オーガニックの社会では、売り手は、「オーガニック」、「エコ」という言葉の入った商品を流行だから儲かるという動機で取り扱うことはしない。売り手は、この商品を買ってもらうことで、買い手の健康や環境保全にもつながるという動機を持って、その商品を扱う。このことから、リアル・オーガニックな社会を実現するためには、自分一人のことだけを考えるのではなく、他人とのつながり、自然、環境、社会とのつながりまでも考慮し、全体がよりよくなる社会を築くことが求められる、と考えることが出来たかが重要になる。

答案の傾向としては、多くの受験生が「リアル・オーガニック」を十分に理解できていないという印象が強い。「リアル・オーガニック」を理解していないことから、そのような社会を実現するための取り組みについての記述は本題から離れた内容になっているものが多かった。

◆ 文学部比較文化学科 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

問題Ⅰ

推薦入試問題（小論文）の意図は、簡単に言うと、英語の長文読解力と、英語の作文力を問うことです。比較文化学科の理念は「日本文化を世界に発信する」ことですが、これは日本文化を理解し、それを英語等の外国語で世界に発信することを意味しています。そのためには、外国語を使って、自分の言いたいことを発信するテクニックを身に付けて欲しいです。

問1は、**a multilingual society**（多言語社会）になりつつある日本社会の問題です。

問2は、母語の大切さを問う問題です。

問3は、日本に住んでいる外国人が自らの文化やアイデンティティを保持するために必要な政策を問う問題です。

問4は、長文読解力と英語の作文力を問う問題です。

問題Ⅱ

問題文は、日本の文化全般が「かざり」と親しい関係にあること、そのため、日本の美術を論じる際には、西洋からもたらされた純粋美術・応用美術の枠組みを取り払うべきであること、そして、そのような日本の「かざり」の全体像を把握するためには学際的な研究の場が必要であることを論じた文章です。

問1は、問題文全体を的確に理解し、それを自分の言葉でまとめる力があるかどうかを見る問題です。

問2は、論じるに相応しい具体的な例を見つけ出す発想力と、自らの意見をまとめ上げる文章力を見る問題です。

<答案の特徴と傾向>

問題Ⅰ

問1

(1) 日本が多言語社会 (**a multilingual society**) になるのに反対する人たちの反対理由三点を問題英文から読み取り、日本語で説明する問題。

設問(1)は第一番目に挙げられている理由を書くよう求めている。解答は「**Those who cannot speak or read Japanese may face numerous inconveniences.**」の文にあり、その意味を30字以内の日本語にまとめればよい。結果として、満点の解答は3割ほど。前半はともかく、後半の英文の意味を取り違えているものが多かった。また、該当文の直前に語られている「**cultural and linguistic assimilation**・・・」の文章の方に力点を置いた解答もあったが、解答文が設問に沿った内容になっている場合にはそれなりに評価し、配点した。こちらの英文では「**for the sake of**」の意味が分かっていないと感じさせる解答が多かった。

設問(2)は、二番目の理由を書くよう求められた問題である。**Nation** を **nature**、**affairs** を **fear** と間違えるなど、単語力不足のために文意が取れておらず、全く見当違いの解答になっているものが予想以上に多く見られた。また、誤字脱字も多かった。

設問(3)は、三番目の理由を書くよう求められた問題である。理由の内容は概ね理解されていたようである。概して容易だったため、相対的によく出来ていた。ただし、外国語と書くべきところを「非日本語」とか「他国語」といった表現が目立った。

問 2

母語が大切であると筆者が考えている箇所については受験生のほとんどが気づいていたが、直訳にこだわった結果、つじつまの合わない解答が多く見られた。また“first language”と“mother tongue”が同じものを指していることに気づいていない答案も、複数見受けられた。加えて、誤字脱字が非常に目立った。

問 3

設問の解答に必要な情報は最終パラグラフに記載されているにも関わらず、機械的に直近のパラグラフを要約した、完全な誤答が非常に多く見られた。解答に必要な情報が最終パラグラフに登場することに着目した答案の出来は良かったが、最終行の動詞“preserve”の意味上の主語が“non-Japanese residents”であることに気づかず、“The government”と勘違いした答案が目立った。“available”、“encourage”の誤訳も目立った。

問 4

基本的な文法事項が理解されていない英文が多かった。主語の単複による動詞の変化、時制の変化などにはほとんど配慮が払われていたかった。BE 動詞と一般動詞を同時に用いるなどの間違いも多くあった。スペルミスはもちろんのこと、基本的な単語のスペルが書けていない答案が目立った。

内容については、多言語社会の意味や本文を理解しないまま、自分勝手なテーマにひきつけて論じているものが多かった。

問題Ⅱ

問 1

本問の解答において重要な点は二つある。一つは「かざり」が特定の学問分野だけでは対応できないテーマであるために、学際的なつながりを必要不可欠とする点が記述できていることである。この点については比較的多くの受験生が指摘できていた。しかし、棒線部分の直前部分の書き写しに留まっている回答も多く見られた。もう一つは、「かざり」が「人間らしい」生活に不可欠であった点、さらに生活全体にとけこんでいるために日本人にとって「親しい関係」にあった点である。この指摘が加わると「かざり」が学問の連携が必要であることの説明をうまく補完できる。二つをバランスよく記述できている回答は残念ながら少なかった。

問 2

問われていることの中身にきちんと向きあって考えた答案が少ない。予め想定していたと思われる比較文化や異文化コミュニケーションに関するテーマにひきつけて論じた答案や、問題文の内容をなぞっただけの答案が目についた。

◆ 文学部人間関係学科 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

道徳について述べられている日本文と英文の一連の文章を読み、読解力、思考力とあわせた小論文能力を把握することをねらいとした。本文で述べられている善悪の判断に関する2つの見方を読み取り、それを具体的に説明させる問1・2と、それらを踏まえた上で、子どもの道徳性向上の取り組みについて論理的に記述する問3を出題した。

子どもの規範意識の低下など、子どもの道徳性の向上は社会的課題となっている。理性・知識によって判断される見方と、文化によって異なる道徳的相対主義の見方を、学校や地域、家庭での価値観の相違や理解の違いといった現実の社会場面の解釈に援用して、その解決策を検討できるかが課題となる。時代や科学、経験的文化的な産物といえる「道徳」について客観的に考察し、子どもの育成という実践場面において、どのような課題を設定し、どのように子どもの関係を方向付けていく（編成する）方策を考えるのか、その論理性（文章構成能力）を重視した。

問1は、日本文の解釈について本文中以外の例を用いて説明することを求め、理解力を問題にした。

問2は、本文の英文の読解能力を把握する問題を出題した。

問3は、本文で示された2つの見方（日本文と英文）を踏まえて、子どもの道徳性向上というテーマについて論文として記述することを求めた。

<答案の特徴と傾向>

全体として、問題の意図を読み取れていない回答や、英文部分を読み取れていない回答が多かった。①設問に的確に回答する記述の仕方、②論文の読解能力（理解力）、③自らの見解を記述する際に、自分なりの結論（主張）について説得的に説明する、ことを心がけてもらいたい。

問1

「例を用いて説明しなさい」という問題であったが、下線部の説明ではなく、例をあげるだけになっている回答や、あげる例自体が下線部と対応していない（下線部の意味を読み取れていない）回答が多かった。

問2

英文読解が全体的にできてなかった。本文中では、類似性がいくつかの視点であげられているが、文化の違い以外の要因が読み取れている者は少なかった。その他、言語発達の説明に終始し、道徳性との関連が述べられていない回答も見られた。

問3

問題文で示された条件である2つの見方を踏まえていない回答が多かった。本文の読み取りが不十分であったり、誤った読み取りがなされたりしている回答もあった。記述する際のエピソードなど興味深い引用も多かったが、主題に沿って構成できていなかったり、結論に向かう論理の展開が不十分であったりするものが多かった。

◆ 法学部 推薦入試（小論文）

<出題の意図・ねらい>

【出題文選択の背景】

出題文の出典は、神野直彦『「分かち合い」の経済学』（岩波新書、2010年）である。

かつての石油ショックは、第二次大戦後の高度成長を可能にした重化学工業の行き詰まりを意味していた。重化学工業化の行き詰りにより経済成長は停滞し、税収が減少した。

日本においても、不況が続き、失業者が増大し、経済活動は停滞し、貧困や格差は広がるばかりである。筆者は、この危機の本質は、「小さな政府」、「小さな労働者（労働組合）」、「大きな企業」を目指す新自由主義により、「小さな政府」、「小さな労働者」の上に「大きな企業」が君臨し、貧困と格差が生じたことによるとみている。

出題文は、「失われる人間らしい暮らし」と題する章からとったものである。筆者は、新しい時代のシナリオとして登場した新自由主義は、実は社会を破滅の方向へ向かわせるものであり、歴史の針を過去へと逆戻りさせるシナリオであるとする。

筆者は、「日本的経営」という日本の産業構造、「家族やコミュニティ」による日本の社会保障制度を検証した上で、誰もが人間らしく働き、生活できる社会を構築すべきであると考えている。設問は、新自由主義についてどのように考え、社会経済システムのあり方についてどのように考えるかを問うものである。

【受験生に何を望むのか】

第一に、文章の読解力・理解力が求められる。筆者のいう新自由主義問題について、筆者の問題意識を十分理解したうえで、その主張のポイントをまとめることが必要である。

第二に、筆者の主張を踏まえたうえで、新自由主義問題についての自分の考えを理論的・説得的に述べることが求められている。

<答案の特徴と傾向>

設問は、まず「筆者の主張を要約すること」を求めている。したがって課題文における筆者の主張の要旨をまとめなければならない。しかしながら、要約が分量的に少なく、中には主張の趣旨を正確にまとめることができているもの等がみられた。また、主語と述語が対応していないもの、原稿用紙の書き方が不適切なもの等、形式面に問題があるものもみられた。

設問は、課題文に示された筆者の主張に対する受験生の考えを求めている。よって、受験生は筆者の主張を理解した上で、自身の考えを述べなければならない。この点において、筆者の主張を十分に理解できていない為か、私見にまとまりのないものがみられた。

解答としては、筆者の主張に賛成するもの、反対するものが考えられるが、いずれであっても論理的、説得的であれば高く評価される。論理的で高く評価されるものもあるが、論理が矛盾するものもみられた。評価の高いものとそうでないものとが明確に分かれた。

また、「分かち合い」がひとつのキーワードであるが、この点について記述しているものが少なかった。

総合問題

<出題の意図とねらい>

第1問（化学）

昨今、地球環境問題として話題になっている地球温暖化を取り上げた。人為的な二酸化炭素の発生源を化学の視点から捉え、二酸化炭素の削減のためにどういった取り組みができるかを考える問題である。まず、日本が消費している石油換算の一次エネルギー消費量から二酸化炭素の排出量を計算する問題は、飽和炭化水素と燃焼の反応式を理解しているかを問うている。つぎに、日本の世界に占める二酸化炭素の排出量比率を求める問題は、石油の消費量と燃焼の関係を理解し、加えて基本的な単位換算ができるかを問うている。最後の記述問題は、上述のことを理解した上でどういった物理・化学的なアプローチが考えられるか、受験生の科学的想像力と論理的思考力を問うている。

第2問（化学）

簡単な構造の有機化合物の性質・反応を題材に、構造と物性、反応熱、酸化還元反応、有機化学反応などに関する知識を問うた問題である。

問1 有機化合物の構造とそれに起因する物性の関係を理解しているかどうかを問うた。

併せて光学異性体に関する簡単な知識を確認した。

問2 典型的な酸化剤である二クロム酸イオンを題材に、電子を含む酸化還元反応式が書けることを確認するために出題した。

問3 分子の構造と分子を構成する原子の性質が、分子の性質に大きな影響を与えることを理解しているかどうかを問う問題である。水分子の沸点が高いという「知識」はあるだろうが、その本質的な理由を、電気陰性度・極性・水素結合などの概念とともに理解していれば、有機化合物についても同様の物性が見られることは容易に理解できるだろう。

問4 簡単な有機化学反応式を書かせた。反応自体は非常に簡単なものであるが、反応させる条件により異なる反応が進行するということを理解してもらいたい。

問5 反応熱に関する基本的な問題。生成熱の定義とヘスの法則について理解していれば、簡単な計算で求めることができる。

<答案の特徴と傾向>

第1問（化学）

問1 炭素数11の飽和炭化水素の化学式は概ね理解されていたが、燃焼式から二酸化炭素の排出量を求める段階では、正答したものは半数強程度であった。

問2 上述の結果を用いて、石油消費量から総排出量および比率を求める問題であり、計算は単純であるが考え方や単位換算を間違っているものも比較的多く見受けられた。

問3 問1、2の結果を踏まえて二酸化炭素の削減の取組を考える、という問題であったが、題意に沿わない解答が多数みられた。また、起承転結が不明確であり、基本的な文章構成に欠けるものが目立った。

第2問（化学）

問1 比較的良くできていたが、窒素を含んだ化合物の構造式が描かれていたり、「例にならって」描かれていないなど、問題文を読んでいないのかと思われる答案も見られた。

問2 反応前後で物質量や電荷が一致しない反応式を書いている答案が見られた。教科書にそのまま書かれているような、簡単な反応式を問う問題ではあるが、酸化還元化学反応式がどのようにして立式できるのかを理解していれば、記憶に頼らずとも問題文の情報だけから解答できるはずである。

問3 無解答の答案が多かった一方で、有機化合物の構造と物性の関係についてよく説明できているものも見られ、差がはっきりと出た問題であった。この問題に解答できている答案では、他の問題もよくできていた。

問4 比較的よくできていた。

問5 熱化学反応式を立式せず、生成熱の加減だけから求めている解答が多かった。本問ではそれでも正解にたどり着けるが、生成熱を含んだ化学反応式を立式し、物質の収支を考慮しながら加減し、反応熱を求めるのが基本であることを理解して欲しい。

面接

<面接内容>

本学への志望動機や本学で学びたいこと、将来構想を各自にプレゼンさせた。また、化学や環境、およびエネルギー問題に関する基礎的な質問を行い、基礎学力、意欲、コミュニケーション能力等の項目について評価した。

<受験生の特徴と傾向>

意欲に関しては概ね良好であった。しかし、質問に対する直接の回答が返ってこないことがあり、コミュニケーション能力の向上が求められる。総じて、まじめさや意欲に関してはほぼ全員から感じることができた。基礎学力に関する質問については、エネルギー問題や環境問題に関連して質問したが、回答に窮する生徒も見受けられた。

◆ 国際環境工学部機械システム工学科 推薦入試（総合問題・面接）

総合問題

<出題の意図とねらい>

第1問（数学）

基礎的な学力を確認することを目的としている。問1は平方根と絶対値、問2、問3は関数とグラフ、問4は三角関数、問5は統計に関する出題である。いずれも基本的な問題である。

第2問（数学）

三角関数、関数の最大値、最小値、接線、面積を求めさせた。いずれも基本的な問題であり、教科書の内容が理解できているかを問う。

第3問（物理）

問1 力学的エネルギー保存の法則、運動の法則の理解力を確認する問題とした。

問2 ドップラー効果の理解力を確認する問題とした。

問3 抵抗線の直列接続と並列接続、オームの法則の理解力を確認する問題とした。

<答案の特徴と傾向>

第1問（数学）

いずれも極めて基本的な問題である。統計に関する問題（問5）の正答率が著しく低かったが、それ以外の問題はよくできていた。

第2問（数学）

問1 変数置き換えの問題である。ほとんど全員ができていた。

問2 \sin 、 \cos を合成して、合成関数の範囲を求める問題である。合成関数の範囲を正しく求められない答案が多く見られた。

問3 変域が制限された3次関数の最大、最小を求める問題である。変域を正しく増減表に反映できていない答案が多かった。

問4 原点における3次関数の接線の方程式を求める問題である。接線の方程式を正しく導けない答案が少数見られた。

問5 領域の面積を求める問題である。面積を求める領域を正しく描けない答案、定積分の計算ができていない答案が多く見られた。

第3問（物理）

問1 力学的エネルギーの保存則から物体の速度を求める問題の正解率は約56%であった。粗い斜面上の物体の加速度を求める問題の正解率は約13%、粗い斜面上を上向きに運動した物体が再び同じ位置を通過するまでの時間を求める問題の正解率は約6%とかなり低かった。問1全体の正解率は約21%であった。

問2 ドップラー効果の基礎的な理解度を問う問題であったが、壁からの反射音の波長を求める問題の正解率は4%でかなり低かった。問2全体の正解率は約16%であった。

問3 回路の合成抵抗を求める問題の正解率は約70%と高かったが、回路の分岐点を含む電圧と分岐点を流れる電流を求める問題の正解率は約27%であった。問3全体の正解率は約45%であった。

面接

<面接の形態>

受験生13名に対し、1人10分程度の個人面接を実施した。

<面接内容と意図>

(1)志望理由等に関する質問

本学本学部の機械システム工学科を志望する動機、将来の進路などについて質問し、学科についての理解度、機械工学の学習意欲、学科への適合性などを見極める。さらに、コミュニケーション能力を確認する。

(2)物理と数学に関する質問（口頭試問）

機械工学を学ぶ上で不可欠な基礎学力が身についているかを確認するため、物理と数学の簡単な問題を示し、口頭で解答させる。数学は、計算用紙の使用も認める。

＜受験生の特徴と傾向＞

今年は、昨年よりも受験生が減ったため、1人当たりの面接時間をやや長く取ることができた。このため、評価のばらつきが昨年よりも大きかった。

推薦入試では、「総合的な学力が問われる一般選抜での合格は難しいかも知れないが、数学と物理は得意で、本学科で機械工学を学びたいという意欲が高い」学生の受験を期待しているが、口頭試問でスラスラ解答できた受験生は少なかった。緊張感も考慮して、ヒントを与えるなどして評価したが、大きな差が付いた。

ほぼ全員が、志望動機として「ものづくり」と「環境問題」への関心の高さを挙げた。学科については、パンフレットやホームページでよく調べていた。将来の目標と入学後の目的を、自分の言葉で具体的にはっきり言えるかどうか、ひとつのポイントとなった。

◆ 国際環境工学部情報メディア工学科 推薦入試（総合問題・面接）

総合問題

＜出題の意図とねらい＞

第1問（数学）

基礎的な学力を確認することを目的としている。問1は平方根と絶対値、問2、問3は関数とグラフ、問4は三角関数、問5は統計に関する出題である。いずれも基本的な問題である。

第2問（数学）

三角関数、関数の最大値、最小値、接線、面積を求めさせた。いずれも基本的な問題であり、教科書の内容が理解できているかを問う。

第3問（物理）

問1 力学的エネルギー保存の法則、運動の法則の理解力を確認する問題とした。

問2 ドップラー効果の理解力を確認する問題とした。

問3 抵抗線の直列接続と並列接続、オームの法則の理解力を確認する問題とした。

＜答案の特徴と傾向＞

第1問（数学）

いずれも極めて基本的な問題である。統計に関する問題（問5）の正答率が著しく低かったが、それ以外の問題はよくできていた。

第2問（数学）

問1 変数置き換えの問題である。ほとんど全員ができていた。

問2 \sin 、 \cos を合成して、合成関数の範囲を求める問題である。合成関数の範囲を正しく求められない答案が多く見られた。

問3 変域が制限された3次関数の最大、最小を求める問題である。変域を正しく増減表に反映できていない答案が多かった。

問4 原点における3次関数の接線の方程式を求める問題である。接線の方程式を正しく導けない答案が少数見られた。

問5 領域の面積を求める問題である。面積を求める領域を正しく描けない答案、定積分の計算ができていない答案が多く見られた。

第3問 (物理)

問1 力学的エネルギーの保存則から物体の速度を求める問題の正解率は約 56%であった。粗い斜面上の物体の加速度を求める問題の正解率は約 13%、粗い斜面上を上向きに運動した物体が再び同じ位置を通過するまでの時間を求める問題の正解率は約 6%とかなり低かった。問1全体の正解率は約 21%であった。

問2 ドップラー効果の基礎的な理解度を問う問題であったが、壁からの反射音の波長を求める問題の正解率は4%でかなり低かった。問2全体の正解率は約 16%であった。

問3 回路の合成抵抗を求める問題の正解率は約 70%と高かったが、回路の分岐点を含む電圧と分岐点を流れる電流を求める問題の正解率は約 27%であった。問3全体の正解率は約 45%であった。

面接

<面接内容と意図>

- (1) 本学科を志望する動機、将来の進路などについて質問し、学科の教育内容の理解度や学修意欲などを確認した。
- (2) 数学の基本問題に関する口頭試問では、必要に応じてヒントを与えて、総合問題で確認できない受験生の持つ本来の実力を引き出そうとした。

<受験生の特徴と傾向>

- (1) 学科の教育内容と志望動機については、明確な回答が得られ、時間をかけて推敲し、繰り返し練習したことがうかがえた。将来の進路については、具体的なイメージを持っている受験生とそうでない受験生とに分かれた。
- (2) 口頭試問については、個人差が大きく、ヒントによって解法を思い出さず受験生とうまく説明できない受験生とに分かれた。

◆ 国際環境工学部建築デザイン学科 推薦入試 (総合問題・面接)

総合問題

<出題の意図とねらい>

第1問 (数学)

基礎的な学力を確認することを目的としている。問1は平方根と絶対値、問2、問3は関数とグラフ、問4は三角関数、問5は統計に関する出題である。いずれも基本的な問題である。

第2問 (物理)

問1 力学的エネルギー保存の法則、運動の法則の理解力を確認する問題とした。

問2 抵抗線の直列接続と並列接続、オームの法則の理解力を確認する問題とした。

第3問（造形）

問1 与えられたテーマに対して的確に題意を捉え、自らの見解を述べているかを問う問題である。特に、論理的思考力、文章表現力、発想力を見る。

問2 問1で述べた見解にそって、自らの提案を自分なりに図解しようとしているか、題意にそった回答をしているかを問う問題である。特に、創造力、二次元及び三次元的な表現力、立体的感覚等の総合的な造形力を見る。

<答案の特徴と傾向>

第1問（数学）

いずれも極めて基本的な問題である。統計に関する問題（問5）の正答率が著しく低かったが、それ以外の問題はよくできていた。

第2問（物理）

問1 力学的エネルギーの保存則から物体の速度を求める問題の正解率は約69%であった。粗い斜面上の物体の加速度を求める問題の正解率は約7%、粗い斜面上を上向きに運動した物体が再び同じ位置を通過するまでの時間を求める問題の正解率は約10%とかなり低かった。問1全体の正解率は約25%であった。

問2 回路の合成抵抗を求める問題の正解率は約66%と高かったが、回路の分岐点を含む電圧と分岐点を流れる電流を求める問題の正解率は約19%とかなり低かった。問2全体の正解率は約39%であった。

第3問（造形）

問1 自分が提案したデザインを論理的かつ的確に説明することができるか、具体的な提案内容に関する文章力や提案自体の発想力を見た。簡潔に、提案の内容、工夫点を分かり易く表現している案もあったが、一文一文が短く、説明自体が稚拙であったり、基本的な文法が間違っている答案も見受けられた。提案の内容は創造的で、興味深いものも多かった。

問2 図面としての正確さ、工夫点等が分かり易く表現できているかどうか、正しく立体が描かれているかどうかを見た。出題意図を逸脱した提案はなかった。テーブルの足を柱状にデザインしているのに、足下が直線で表現されているなど、立体的な表現に不整合な点がある答案がいくつか見られた。テーブルと足との接合方法やテーブル自体をどのように作っているかを詳しく説明している答案がある一方、デザインした形態のみで、図に全く説明のないもの、接合方法が不明確なもの、寸法が充分記入されていない答案もあった。

面接

<面接内容>

10分程度の個別面接を行った。

- ・志望動機、高校生活の充実度や実績・積極性に関する質問
- ・地球環境問題への関心度に関する質問
- ・本学科の教育目的・内容の理解度および学科への適合性を確認するための質問
- ・「建築」に対する興味や意識の高さを確認するための質問

- ・本人の長所を確認するための質問
などに対し、回答を求めた。

<受験生の特徴と傾向>

本人の意見を的確に述べることができる受験生と予め準備していた回答しか述べることができない受験生がいた。事前に暗記した内容を答えるだけでは、本人の個性や表現力、コミュニケーション能力等が分かりづらい。

地球環境問題への関心度は高い受験生が多かった。学科の特徴やカリキュラム内容及び「建築」に対する興味については、ホームページ等で詳しい情報を入手しており、多くの受験生から本学科で学びたいという意欲が強く感じられた。建築に関する知識も、事前に調べている学生が多く、興味のある建築を訪問している学生もあった。

◆ 国際環境工学部環境生命工学科 推薦入試（総合問題・面接）

総合問題

（第1問 必須）

（第2問 A、B、C から1題選択）

<出題の意図とねらい>

第1問（化学）

昨今、地球環境問題として話題になっている地球温暖化を取り上げた。人為的な二酸化炭素の発生源起源を化学の視点から捉え、二酸化炭素の削減のためにどういった取り組みができるかを考える問題である。まず、日本が消費している石油換算の一次エネルギー消費量から二酸化炭素の排出量を計算する問題は、飽和炭化水素と燃焼の反応式を理解しているかを問うている。つぎに、日本の世界に占める二酸化炭素の排出量比率を求める問題は、石油の消費量と燃焼の関係を理解し、加えて基本的な単位換算ができるかを問うている。最後の記述問題は、上述のことを理解した上でどういった物理・化学的なアプローチが考えられるか、受験生の科学的想像力と論理的思考力を問うている。

第2A問（化学）

簡単な構造の有機化合物の性質・反応を題材に、構造と物性、反応熱、酸化還元反応、有機化学反応などに関する知識を問うた問題である。

問1 有機化合物の構造とそれに起因する物性の関係を理解しているかどうかを問うた。

併せて光学異性体に関する簡単な知識を確認した。

問2 典型的な酸化剤である二クロム酸イオンを題材に、電子を含む酸化還元反応式が書けることを確認するために出題した。

問3 分子の構造と分子を構成する原子の性質が、分子の性質に大きな影響を与えることを理解しているかどうかを問う問題である。水分子の沸点が高いという「知識」はあるだろうが、その本質的な理由を、電気陰性度・極性・水素結合などの概念とともに理解していれば、有機化合物についても同様の物性が見られることは容易に理解できるだろう。

問4 簡単な有機化学反応式を書かせた。反応自体は非常に簡単なものであるが、反応させる条件により異なる反応が進行するという理解をもらいたい。

問5 反応熱に関する基本的な問題。生成熱の定義とヘスの法則について理解していれば、簡単な計算で求めることができる。

第2B問（生物）

植物の反応と調節を題材として生物分野の基礎知識を問う問題である。植物の屈性とそのしくみについて正しく理解しているか、また光周性と発芽形成のしくみについて正しく理解できているかどうかを評価する問題である。

第2C問（物理）

問1 力学的エネルギー保存の法則、運動の法則の理解力を確認する問題とした。

問2 ドップラー効果の理解力を確認する問題とした。

問3 抵抗線の直列接続と並列接続、オームの法則の理解力を確認する問題とした。

<答案の特徴と傾向>

第1問（化学）

問1 炭素数 11 の飽和炭化水素の化学式は概ね理解されていたが、燃焼式から二酸化炭素の排出量を求める段階では、正答したものは半数強程度であった。

問2 上述の結果を用いて、石油消費量から総排出量および比率を求める問題であり、計算は単純であるが考え方や単位換算を間違っているものも比較的多く見受けられた。

問3 問1、2の結果を踏まえて二酸化炭素の削減の取組を考える、という問題であったが、題意に沿わない解答が多数みられた。また、起承転結が不明確であり、基本的な文章構成に欠けるものが目立った。

第2A問（化学）

問1 比較的良くできていたが、窒素を含んだ化合物の構造式が描かれていたり、「例にならって」描かれていないなど、問題文を読んでいないのかと思われる答案も見られた。

問2 反応前後で物質量や電荷が一致しない反応式を書いている答案が見られた。教科書にそのまま書かれているような、簡単な反応式を問う問題ではあるが、酸化還元化学反応式がどのようにして立式できるのかを理解していれば、記憶に頼らずとも問題文の情報だけから解答できるはずである。

問3 無解答の答案が多かった一方で、有機化合物の構造と物性の関係についてよく説明できているものも見られ、差がはっきりと出た問題であった。この問題に解答できている答案では、他の問題もよくできていた。

問4 比較的よくできていた。

問5 熱化学反応式を立式せず、生成熱の加減だけから求めている解答が多かった。本問ではそれでも正解にたどり着けるが、生成熱を含んだ化学反応式を立式し、物質の収支を考慮しながら加減し、反応熱を求めるのが基本であることを理解して欲しい。

第2B問（生物）

植物ホルモンの働きを中心に、植物の外部刺激への反応と成長の調節を題材として生物分野の基礎知識を問う問題であるが、天然のオーキシンの化合物名の正答率は高かったが、合成オーキシンの例をあげることができた答案は少なかった。植物の光屈性と頂芽優勢における植物ホルモンの働きについては、光屈性についての理解度が高い傾向にあった。以上については、解答者の間のばらつきは小さかったが、春化処理と日長の影響については、理解度に大きなばらつきがみられた。

第2C問（物理）

問1 力学的エネルギーの保存則から物体の速度を求める問題の正解率は約56%であった。粗い斜面上の物体の加速度を求める問題の正解率は約13%、粗い斜面上を上向きに運動した物体が再び同じ位置を通過するまでの時間を求める問題の正解率は約6%とかなり低かった。問1全体の正解率は約21%であった。

問2 ドップラー効果の基礎的な理解度を問う問題であったが、壁からの反射音の波長を求める問題の正解率は4%でかなり低かった。問2全体の正解率は約16%であった。

問3 回路の合成抵抗を求める問題の正解率は約70%と高かったが、回路の分岐点を含む電圧と分岐点を流れる電流を求める問題の正解率は約27%であった。問3全体の正解率は約45%であった。

面接

<面接形式と内容>

基礎学力、意欲、コミュニケーション能力、人物、その他の各項目について、5人1組になり、30分程度の集団面接を実施した。

<受験生の特徴と傾向>

環境問題に対する質問に関しては、十分に準備してきたものと思われ、多くの受験生が質問に対して的確に回答していた。しかしながら、環境問題に関する真の理解が不足しているのか、具体的な内容になると間違えた発言なども目立った。今年度は、積極的で、まじめな学生が多い印象を受けた。